

主任コラム10月号

主任 澤井良子

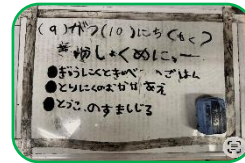
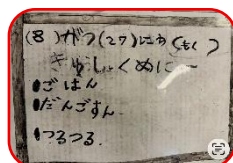
0・1歳児の混合クラスでの姿です。7か月の赤ちゃんが寝返りを出来るようになり、畳の部屋で寝返りをしようとしていると、1歳児の子ども達が自然と集まり「がんばれ！がんばれ！」「できるかな？」と側で応援しながら見ていました。自分より小さなお友達が一生懸命に身体を動かす姿に声を掛けながら、見守っている姿がとても印象的でした。今年度は、0・1歳児クラスでは、24か月発達の開きが大きいのでこういった姿が見られます。まだ生まれて間もない子ども達が、0歳児や、1歳を迎えたばかりのお友達に対して、教えたり、声を掛けたりという人間関係の学びの場となっています。



9月15日から18日には、鈴峰中学校の2年生10名の職場体験がありました。それぞれが、各年齢のクラスに入り保育士体験をしたのですが、振り返りでは「一人ひとりに合った接し方をしていた」「何かあった時には、まず子どもの話を聞いていた」「年齢によって話し方や関わり方が違った」「危ないことやいけないことは、しっかり伝えていた」など、保育者と子どもの関わりについて気付いたことがたくさん書かれていました。一方で、中学生が実際に子どもと関わる中では、困っている子を見ると先に手を貸したり、どうしたらよいのかを迷ったりする姿もありました。その姿を見ながら、私たち保育者が普段何気なく行っている「待つ」「見守る」「必要な時に支える」という関わりについて、改めて考える機会にもなりました。「待つ」ということは、何もしないことではありません。子どもの様子や気持ちを見ながら、どこまで自分でできそうなのか、いつ手を差し伸べる必要があるのかを考えることも、保育士の大切な役割だと思いました。自分達で考え、積極的に保育士の仕事を知ろうとしていた中学生のみなさん、ありがとうございました。

また、10月にある年長児の行事「お泊り保育」では、朝食に食べるパンを自分達で決めています。「これが食べたい」と選ぶだけでなく、本当に食べられるのか家庭で話したり、実際に買って食べてみたりしながら考え、自分で決めていく姿がありました。そして、毎日行っている、翌日の給食のメニューを書く当番活動では、字を上手に書くことが目的ではなく、自分達で給食室へ聞きに行き、聞いたことを覚え、友達と確認したり協力したりしながら書いています。その経験の中で、自然と文字への興味にも繋がっていったらと思って見えています。

乳幼児の「やってみよう」とする姿から、年長児の「自分で考え、選び、決める」姿まで、発達によってその姿はさまざまです。大人が先に答えを出すのではなく、子ども達が考えたり、試したり、時には迷ったりする積み重ねが、自分で考え行動する力に繋がっていくのだと思います。これからも、一人ひとりの発達や姿を丁寧にしながら、「待つ」「見守る」ことを大切にし、必要な時にはそっと支えられる保育をしていきたいと思っています。



給食のメニュー